

【君たちは、昨日7日(木)6限の美術中間テストは出来ましたか?】雑学⑤

2017年の進路通信から 行ってきました東京国立博物館「運慶展」良かったです!

◆君たちがよく知っているのは、東大寺南大門の金剛力士立像(阿形・吽形)だろう。日本仏像界に革命を起こした「天才仏師・運慶」。彼が活躍したのは、平安から鎌倉へと移り変わる激動の時代だ。武士に人気を博したリアルで迫力のある仏像を生み出し、仏の魂までもデザインしたと言われている。

◆現存する運慶の作品は全部で31体とも言われ、そのうちのなんと22体が集結した空前絶後の展覧会。デビューから晩年までの傑作が展示され、その作品の多くを360度ぐると見られる企画展だ。

◆日本の仏像を変えた運慶独自の技法、その唯一無二の表現方法は、まるで生きているかのような写実性と精神性な深みに富む作品を生み出し、その運慶仏の迫力を思う存分堪能してきました。そして、なんととっても稀代の仏師・運慶の天才たるゆえんが理解、感じられる作品の一つ目は、肖像彫刻の**法相六祖坐像**、重源上人坐像だろう。

◆特に東大寺の復興に尽力した**重源上人坐像**は、老いの様相を迫真に迫りながら捉えた顔貌の描写には息をのむ。皮がたるみ、筋が浮いた首、そげた頬(ほほ)に刻み込まれた皺(しわ)、左右で開き方が違う目とその下に垂れた肉、頑固者らしく結ばれた口元・・・丸くかがめ体軀から首を前に突き出した姿勢は、老いをリアルに表現している。

◆二つ目は、古代4～5世紀インドの実在の兄弟僧、**無著・世親菩薩立像**(法相宗の教学「唯識」の開祖)だ。無著・世親には、運慶は会ったこともないのに、このリアルさはなんと驚く。雄大な体軀に大ぶりの衣文を刻み、肩から背中にかけての後ろ姿も慈悲の温かみがある。深い精神性をおびた翳り(かげり)のある表情も、唯識を極めた存在感がひしひしと伝わってくる。この彫刻のお姿こそ無著世親だと思わせられる!

◆三つ目は、かの天平彫刻の「阿修羅像」以来の少年像の名作**「八大童子立像」**。これに至っては、もう立ち去りがたい感情にみまわれました。仏像という感じではなく、「街角にこんな表情をした少年いるいる!」といった感じなんだ。

◆でも、行者が体得すべき「教え」と「行い」を象徴する少年像たちの変化に富んだ姿態や表情は、若々しい精気にあふれ、玉眼の効果でその存在感も増してくる。そして観れば観るほど少年像だが、仏像のような霊的パワーをも感じてくる。

※玉眼(ぎょくがん)は、仏像の目をより本物らしくみせるために水晶の板をはめ込む技法。

※玉眼とともに、密教仏像で、波のような形式的「衣のひだ」を**翻波式衣文(ほんばしきえもん)**ということも要チェック・・・重要

